

1 資料について

(1) 名称・員数・内容

ア 文化財の名称、員数等

種別	名称	員数	指定年月日
国指定重要文化財 歴史資料の部	江戸城造営関係資料（甲良家伝来） 一、指図類 一、記録類 附 家伝書類 4巻、18冊、4帖	27巻、1冊、3帖、11幅、460鋪、81枚 36冊、1枚	昭和62年 6月6日

（全646点）

イ 文化財の内訳、形態、内容

646点の内訳は、指図類583点、記録類37点、附家伝書類26点である。

資料の大部分を占める指図は、建築設計図面で、形態では大半が折畳装の一枚物、半紙大の小型図から紙を貼継ぎ地図畳にした大型図まで1点ごとに法量（大きさ）は様々である。これらは、料紙に墨で直に細い線、細かい文字を書き込んだ書絵図である。内容は、寛永から幕末に至る江戸時代の各造営年度・修理に伴って作成された図面である。本丸御殿に関するものが最も多く、次いで西の丸御殿、櫓、紅葉山、天守、吹上その他である。なかでも万延度の本丸御殿については、基本的な図（平面図、立面図等）から詳細図や原寸図までが一連のものとして豊富に揃っている。各図面には、縮尺、寸法、仕様を記し、極めて詳細・正確である。奥書には年紀、大棟梁の署名、印がある。また、造営年度を示す印判が押されているほか、関係した諸役人の名前や、実際の建築工事に関わる注記等も多く書込まれている。

記録類は、建築関係帳簿で、形態は冊子である。内容は、本途帳などの建築関係積算資料や、絵師の名簿、材木・瓦等の目録帳ほかである。

家伝書類は、建築関係の技術等を伝える書類で、形態は、冊子、折本、卷子がある。内容は、木割、雛型、仕口等、甲良家に伝わった建仁寺流の建築技術書である。

ウ 修理及び保存事業について

平成13～16年度の4年間で国庫補助事業*により、修理と保存対策を行った。修理資料は108点を対象とし、保存対策は指図全点を収納する保存箱の作製を行った。

実施状況

年度	修理	保存箱 作製
平成13年度	45点（指図44、冊子1）	大型7組、小型2組
平成14年度	4点（指図4）	大型10組、専用箱4点
平成15年度	30点（指図30）	大型21組、専用箱7点
平成16年度	29点（指図26、折本2、卷子1）	
計	108点 （指図104、冊子1、折本2、卷子1）	40組（小型2、大型38） 専用箱11点

* 「国宝重要文化財等保存整備費補助金」による美術工芸品保存修理事業

エ 修理資料の選定

全般に資料の保存は良い状態のものが多く、特に損傷の激しいものを修理の対象とし、次のように選定した。

- (ア) 『東京都立中央図書館建築関係資料保存対策調査報告書』(1983.3 平井聖)(以下「報告書」と略記)(注1)で「要修補」の指摘に基づいた。
- (イ) 東京都立中央図書館の「重文修理判別基準(案)」(2001.6)により、現状維持の基本方針で、資料を良好な状態で長く保存することを目的に選んだ。
- (ウ) 具体的には、虫損、破損箇所が字・線にかかり、図が判読不可能なもの、複雑な貼紙が多数あり剥離しかかっているもの、カビ・シワ等の損傷が甚だしいものを重視して選んだ。虫損があっても、字や線にかからず余白にあるもの、判読可能なもの、経年変化によるシミ・変色等には手を加えないこととした。
- (エ) 損傷の状態が同程度であっても、資料の構造上の問題点、利用状況等を検討し、総合的に判断した。

(2) 資料の伝来

「江戸城造営関係資料(甲良家伝来)」は、甲良家に伝わった江戸城建築に関わる資料群である。甲良家は、近江犬上郡法養寺村(現滋賀県犬上郡甲良町)の出身で、豊後守宗広(1574~1646)を初代とし、11代棟隆まで代々作事方大棟梁を勤めた家柄である。江戸城、増上寺、寛永寺、日光東照宮等、幕府直轄の建築工事は、大部分甲良家が携わって設計監督や修理を行った。甲良家に伝わった古文書と図面の多くは、昭和3年(1928)に甲良家最後の当主伝次郎氏(棟隆の子 1874~1946)から、当時の日比谷図書館に「甲良家文書」として納められた。「甲良家系図」によると、資料を日比谷図書館に斡旋したのは、大熊喜邦氏である(注2)。昭和3年、大熊喜邦氏の「江戸城に関する講演会」によると、日比谷図書館に収まるまで甲良家図面を保管していたのは大島盈株氏である。大島盈株氏は、10代棟全の子で大島家に養子にいき、また、甲良若狭に弟子入りして作事方の一員となり、明治維新後に12代大棟梁を継いだと言われている(注3)。しかし、日比谷図書館は、昭和20年5月、戦災により建物・蔵書は全焼、重要書類を全て焼失してしまったので詳細な経緯は不明である(注4)。

本資料群は、現在、東京都立中央図書館特別文庫室内東京誌料(注5)に収められているが、ここに至るまでの経緯を記すと次の通りである。

第2次世界大戦末期、日比谷図書館は戦禍から図書を守るため、学者・蔵書家から図書を買上げるとともに所蔵の貴重資料を多摩地域に疎開させる事業を行った。(注6)。戦後、疎開図書は東京都内に戻ったが、木造仮建築の日比谷図書館では狭く収蔵スペースも十分ではなかったため各所に分散して預けられていた。昭和32年(1957)、日比谷図書館が今のような三角形構造のコンクリート建築で出来上がったときに引取られ、東京誌料等の貴重資料は特別文庫室に収められた(注7)。昭和48年(1973)、旧日比谷図書館の蔵書を引継いで東京都立中央図書館が開館し、特別文庫資料も都立中央図書館に移管した。昭和62年(1987)、その内646点が近世建築史上貴重であるとして歴史資料の部で一括して国の重要文化財に指定された。

注

- 1 『東京都立中央図書館建築関係資料保存対策調査報告書』及び同報告書別冊『東京都立中央図書館建築関係資料一覧』 平井聖編 東京都立中央図書館 1993.3
平成4年度、東京都立中央図書館は、特別文庫の建築関係資料について調査委託を実施した。本報告書は、江戸城造営関係資料（甲良家伝来）と木子文庫写真資料の保存状態の現状調査、および今後の保存対策・閲覧方法の検討結果をまとめ、提言を行ったもの。
- 2 甲良伝次郎氏筆写の甲良家系図の巻頭に、「依工学博士大熊喜邦氏斡旋、江戸城日光廟其他神社仏閣之図面及古文書一切献納日比谷図書館、供一般斯界参考資料」とある。（大河直躬「甲良家系図をめぐって」『大日光』50 日光東照宮 1979.3
- 3 「江戸城殿舎の建築と甲良家」大熊喜邦述（『江戸城物がたり』東京市立日比谷図書館 1929.3 p.32,33 東京誌料文庫所蔵）
『江戸城 その歴史と構造』小松和博著 名著出版 1985.12 p.103,107
『新建築』56 巻 14 号（1981.12 臨時増刊）日本の建築家 p.20
- 4 明治以来の日比谷図書館に関する最重要書類はリュックサック 2 個分にまとめて置いてあったが、5月25か27日の晩、灰燼に帰してしまったと伝えられている。
- 5 大正天皇即位礼に際して東京市に贈られた資金をもとに日比谷図書館が収集した江戸・東京研究のための郷土資料の集成。『東京都立中央図書館 20 周年記念誌』東京都立中央図書館 1994.3 p23
『東京の近代図書館史』佐藤政孝著 新風社 1998.10 p.79 - 81
- 6 「昭和20年8,9月頃の疎開状況一覧」によると、西多摩郡多西村(現あきるの市)各倉庫に疎開していた。「かくして文化財はまもられた」(『館報ひびや』5巻6号、通巻53号 東京都立日比谷図書館)「資料疎開事業半世紀を超えて」(『ひびや』通巻149号)
『東京都立中央図書館 20 周年記念誌』東京都立中央図書館 1994.3 p26
『日本の古典籍 その面白さその尊さ』反町茂雄著 八木書店 1984.4 猛火の下の古書を救った人 p.499 - 514
- 7 『東京の近代図書館史』同上 貴重図書の買上げと図書資料の疎開 p.161-170、仮設館での開館 p.184-186、日比谷図書館の開館 p.211-212